



特集  
原発とドキュメンタリー

巻頭グラビア&インタビュー / 武田慎平  
映画監督座談会 / 船橋淳 × 藤原敏史 × 松林要樹 × 瀬々敬久  
インタビュー / 高山明 語り下ろし / 開沼博

#02  
2013 SPRING  
1000YEN

小特集 21年目の不在 小川紳介トライアングル

# 存在し得ない義人たちの連帯——山形での小川紳介

義人は分裂に分裂を重ねて、千万言を費やしてさらにしゃべったことが仇になって決して統一を生み出さない。それが義人の法則だね。その点、悪人は早いんだ。悪人は連合し、義人は分裂するという社会科学的法則だね。それでも義人は言葉によって連帯できると思っている……  
静見俊輔、安田武著「忠臣蔵と凶悪怪談・日本人のコミュニケーション」

一九七〇年代始め、日本のドキュメンタリーは絶頂の時にあった。東京国立近代美術館フィルムセンターは一九七三年と一九七四年に大規模な戦前・戦後のドキュメンタリーの回顧上映を行い、一九七三年小川プロは『三里塚・辺田部落』を、同年に土本典昭は『水俣一揆——一生を問う人々』を公開したところだった。一九七五年の『不知火海』は土本の最も優れた映画であったかもしれない。この時代には驚くべき数の素晴らしいドキュメンタリーがつくられた。だが、中心となった人々のうちに劇映画へ転向するか、まったく映画づくりをやめてしまうことになった。一九七〇年代始めは鈴木木郎康や原一男といった芸術家が注目を集め始めた時期でもあった。こうした出来事は皆、小川紳介が三里塚を後にし、山形へと向かう宿命的な決断をする直前に起きていた。

## 映画で「恋文」を書く

でなく、闘争の中にあっても後には引かなくなった。彼らのカメラは、壁に停まった

には魂への畏怖と詫びの感情が深く残り続けた。彼らの潜在意識の中に、不平常な

や単なる「被写体」ではなくなった。映画製作に参画して自ら撮った（以下略）

『三里塚・辺田部落』の制作中に小川プロは変容し始めていた。一九七二年に東北支部が解散し、北海道と関西支部が矢継ぎ早にそれに続いた。九州支部は一九七五年まで続いたが、その頃にはすでに小川プロは三里塚を後にし、とりわけ成功した『辺田部落』の上映行程で出会った農民詩人の木村迪夫の誘いに応じることになった。向かっていった。木村は小川に、『辺田部落』は三里塚での経験の要約のように感じた。どこにも行くところがないのなら牧野へ来たらどうかと冗談半分で伝えた。小川がすでにスタッフに、新天地を探し、九州の食糧協同組合や他の大阪、北海道などへ移ることを検討させていることなど木村はほとんど知らなかったのだ。木村迪夫は大いに驚いたが、一九七五年に小川プロは木村の申し出を受け入れて、米と映画をつくるため、山形へと向かった。

すでに根を下ろし、政治的なホットスポットでもあった三里塚から離れて、静寂な村、牧野へ移住するという小川紳介の決断は多くの人々を長年にわたり混乱させてきた。多くは当時、小川プロは「転向（戦前の社会主義者の政治的背信行為）のよう」に運動に背を向けたと考え、今も考えていることだろう。「日和見」であると弾劾する者もいた。小川プロ内部でも最終的な決断を下す前に活発な議論が行われた。そして移住することが決定された時点でかなりのスタッフが去っていった。

持ちを表わしていました。おじいさんおばあさんの世代には食べ物や着る物も自分たちでつくっていたのだから、私たちもやってみよう！となったわけですね。」  
木村迪夫は最も興味深い説明をしている。木村が山形へ移住することを勧めたのは、基本的には木村自身が退屈であったからという自分本意な理由からだった。牧野は信じられないほど静かで、単調な土地だったからだ。木村は牧野を、作物がすでにただ腐敗の過程にあるような沼に例えた。三里塚シリーズの映画の作り手を牧野へ連れてくることは沼を干拓して、生産力のある土壌に変えるようなものだったのだ。生活が興味深いものになることは確かだった。小川が牧野へ来ることを決めたのはそこがまさに沼地じみていたからだ。三里塚で「政治の限界」を知り、今度は農民の「生命力」を体験しようとしていたのだ。『辺田部落』の闘争で吹き出した生命力は、農民の日常へと飛び込んでいった。牧野は実に静かなところだ。東京に住んでいる人々からすれば、新幹線開通以前の山形は、街々や電車の駅の数々を通り山村へたどり着くことで初めて強く実感するような、僻地の感があったことだろう。まさにこうした沼地を小川は望んでいたのだ。次第に瑣末で邪魔なもののように感じられてきた政治闘争と距離を置き、ニッポンの農村について考えることができるような場所を。（以下略）

振り返ってみて、小川紳介は、一九七〇

山形の農村へ行くということはこうした気

（※）小川紳介、静見俊輔「小川紳介」(名古屋シネマテーク、1999年)